

森の呼ぶ声

文
フランチェスカ・メレンデス
写真
ベン・ロバーツ

広大な熱帯雨林に覆われたスリナム共和国の内陸部は、陸路でのアクセスが限られ、訪れる人はきわめて少ない。そのため、豊かな自然環境がほとんど手つかずの状態に残されている。スリナムの主要な河川は、そうした風景のなかを蛇行しながら、この国の多様な植生と動物が織りなす美しい眺めを一望できる場所へと、誘ってくれる。



【当ページ】
スリナムには、多種多様な熱帯植物が自生している。現地で「カンカントリ」と呼ばれるカボックの木(上)は、水に浮かび耐水性のある、コットン状の繊維を産する落葉樹で、現地では断熱材やライフジャケット、マットレスや枕など、寝具の材料として

使われる。ワニの一種であるカイマン(下)はアリゲーターの仲間、体長4.5mにもなる。スリナムの湿地帯で、最も頻繁に見かける生き物だ。【次見開きページ】
流れが速く、水位が急激に変化するバルムー川は、大きく蛇行して流れる。

り、息の合った動きで船を上流へと押し進める。疾風のようなその動きは、オランダの作家でアフリカ系スリナム人のテッサ・レウシャが、夫とのスリナムの旅を詳細に綴った著書『野生の運河(原題: De Wilde Vaart)』を思い起させる。レウシャは、川を航行する体験を通してふたりが感じ取った人生哲学を述べるにあたり、アメリカの西部開拓時代の暮らしになぞらえて「川のカウボーイ」という表現を用いている。「私にとって、カウボーイは何にも束縛されず、自由に生きている人々のように思える。彼らは直感に従って生きていく」と、レウシャは記している。

目の前で繰り広げられる水上のロデオを鑑賞しながら、私はレウシャの比喻に感謝する。「川のカウボーイ」たちは、水の力を利用して、岩だらけの急流のなかでカヌーと格闘し、バルムー川に飛び込むと、素手でナマズをつかみ上げる(獲物は夕食の時に焚火で焼いて食べる)。銀色のハチエットフィッシュが川から飛び出し、水面を滑走していく。オオカワウソの家族が、通り過ぎていく私たちを興味深げに見つめている。水辺では、カピバラが慌てて、「モコモコ」と呼ばれるサトイモ科の植物をかき分け逃げていく。途中エカ所で、ルシアン船長はカヌーの速度を落と



した。滑らかで平らな岩の上でじっとして動かないカイマンの姿が目に入ったのだ(写真当ページ下)。
さらに川を遡ると、現地で「カンカントリ」と呼ばれる銀色に輝くカボックの木が、樹冠を突き抜けてそびえている(写真当ページ上)。先住民はこの木に善霊が宿ると信じ、伐採は禁じられている。樹高70メートルにもなるカボックは、アマゾンの熱帯雨林で最も背が高く、視線を空へと誘う。
水上で2日を過ごし、私たちはようやくベースキャンプに到着した。ここからカシカシマ山まで



国連食糧農業機関 (FAO) の2020年の報告書によると、スリナムは総土地面積の97.4%が森林に覆われ、世界で最も森林率が高い国である。道路はほぼなく、内陸部への移動は、バルムー川(当ページおよび前見開きページ)などの河川をカヌーで遡るのが

一般的だ。川の源流は、ブラジルの国境沿いトゥムクマケ山脈にある。雨季には水位が急激に上昇し、氾濫を起こすが、乾季には至るところで浅瀬や砂地が出現する。そのため、旅の途中、クルーがカヌーを手で持って運ぶこともしばしばだ。

カヌーの船先にいたロマーリオ・アレケボエンが、突然、服を着たまま、足から川に飛び込む。澄み切った急流に腰まで浸かりながら、半ば水に沈んだ岩に体を預け、船を早瀬に押し出すと、アクロバティックな身のこなしでカヌーへと戻る。4日間の密林遠征に十分な食料と、その他諸々の物資を積んだ、全長6メートルの木造船の重さや速度をもとめせず、ロマーリオはこの一連の動きをいとも簡単にやってのける。彼はまだ7歳だが、すでにその強靱さは、私たちが旅をしている川の名前、バルムーそのものだ。それは、この地域にはるか昔から暮らすアメリカ先住民ワヤナ族の言語で「強い精神」を意味する。このカヌーの旅の初めに、私はワラバ(南米北部に分布するマメ科の広葉樹)の木陰でバックパックを背負った。垂れ下がったワラバの蔓には赤紫色の花が咲き乱れ、蜜を求めて虫たちが群がっていた。

ことなく残った。
私たちはバラマリボから6人乗りの小型機に1時間ほど乗り、バルムー村に隣接する滑走路に降り立った。ここからカヌーで、花崗岩の山、カシカシマを目指す。ブラジルとの国境から60キロ以上離れた、カシカシマに向かうカヌーの旅の出発点としては、うってつけの場所だ。
ティリヨ族、ワヤナ族、アラワク族を含む9人のメンバーで、2日かけてサワニボト滝のベースキャンプを目指す。船首では、ロマーリオとルダムス兄弟ふたりと、いとこのアネリが協力してバランスを取り、いつでもカヌーの向きを変えられるよう備えている。その後ろに、ガイドのジュリアス・ファン・トロムと料理人のラメッシュ・トローが座る。舵を取る船長のルシアン・メリウアは、すべてを見通す眼差しで川全体を注意深く見渡しながらモーターを操り、そのすぐ手前に一等航海士のレイミシオ・メリアンが座っている。

例年より長く続いた乾季がちやうど終わる時期で、水位が低いため、船足は遅い。クルーたちは、手信号と口笛で頻繁にやり取りしている。その動作はきびきびと響いていて無駄がない。とりわけ急流に差しかかると、一斉に立ち上がる。

例年より長く続いた乾季がちやうど終わる時期で、水位が低いため、船足は遅い。クルーたちは、手信号と口笛で頻繁にやり取りしている。その動作はきびきびと響いていて無駄がない。とりわけ急流に差しかかると、一斉に立ち上がる。



クルーたちの動作は
きびきびとしていて
無駄がない。急流では
一斉に立ち上がり、
息の合った動きで船を
上流へと押し進める。

16キロ、熱帯のジャングルを進んでいく。十分に
休息を取ったおかげで、夜明け前のまだ暗い時
間に目覚めると、周囲の森は生命の活気に満ち
溢れていた。ハンモックに揺られながら、目を閉
じ、新しい一日の到来を告げるアマガエルやセミ、
鳥たちのオーケストラに耳を傾ける。突然、対岸
の木々の奥の方から耳慣れない音——しわがれ
た鳴き声が聞こえてきた。私はハンモックから降
りて、急な坂道を川辺まで下り、向こう岸に目
をやりながら沐浴した。

その後、キャンプ地の野外食堂で、薄切りにし
た鮮やかなオレンジ色のパイアヤを頬張りなが

ら、ガイドのジュリアスにさつき聞こえた鳴き
声について尋ねてみた。「あれはジャガーです」
と、私の表情を見て満面の笑みを浮かべながら、
彼は答える。「耳障りな声ですよ、まったく！」
と、ルシアン船長も笑いながら口を挟み、咳払
いのようなジャガーの唸り声を真似る。「気をつ
けて」と、ジュリアスが川の方を指差しながら、
悪乗りして警告する。「聞きつけて、こっちに向
かって来るかもしれないので。ジャガーは泳ぎ
が得意ですから」。

小道を歩き出した私たちの前に、単発の散弾
銃を肩に掛けたレイミジオがあらわれた。彼の

姿を見て、私は安心すると同時に畏怖の念にか
られた。先住民族が行う必要最小限の狩猟につ
いて、本で読むのと実際に見るのでは大きな
違いがある。時折、さまざまな鳥やサルやサルの鳴き
真似をする以外、男たちは黙り込んでいる。そ
の矢先、樹冠の枝間を飛び回っていた、オリー
ブ色の羽を持つマレイルシャクケイを見つけた。な
り狙いを定め、寸分の狂いもなく撃ち落とす。そ
レイミジオは倒木の幹に座り、切り落としたヤ
シの葉で幅広のひもを編む。獲った鳥を背負っ
て運ぶために使うのだ。

樹間に、蝶番が軋むような甲高い鳴き声に続



【当ページ】
（右上から時計回りに）
イワドリは高地に生息する
在来種で、オスはくちばしを
覆い隠すほど大きな冠羽を
持つ/ダイサギもスリナムでは
在来種だが、スウェーデンや
セーシェルなどでも迷鳥として

観察される/クモザルは、
この緑豊かな森林環境における
種子散布の重要な役割を担う。
【次ページ】
カシカシマ山は花崗岩の残丘だ。
剥き出しの岩盤に適応した
動植物が生育できる、
手つかずの環境を提供している。



けて低い鳴き声を発する、くちばしの黄色い鳥
が見えた。「聞こえますか」とジュリアス。「オオ
ハシが雨乞いをしています」。
小川の縁の砂地で、2種類の動物の足跡を見つ
けた。体重が300キロにもなるバクは、サイの
近縁種で、水を飲みに来たようだ。そして、ジャ
ガーも。私が不安を募らせる前に、ジュリアスが
周囲の植物の豊かな多様性について話し出し、気
を紛らわせてくれた。木質のつる植物は解熱薬と
して使われる。先のとがったムームーヤシは、ワ
ヤナ族の伝統的な家の屋根を葺くのに用いられ
る。現地で「電話」と呼ばれる木は、叩くと大き

な音がして、密林のなかでも20キロ先まで聞こえ
るので、SOSとして使用される。
カシカシマの麓に近づくにつれて、地面の様子
が変わり、露出した花崗岩が見られるようにな
る。ここではイワドリを見た（写真右上）。カザ
リドリ属の鳥で、オスは黄色みを帯びた鮮やかな
オレンジ色の羽を持つ。
急な坂を登ってもなお樹冠は厚く、カシカシ
マの花崗岩の岩棚のひとつに到達したところで、
ようやく木漏れ日が差し込んでくる。きつい登
山の末に、ジャングルを見渡す壮大な風景が目
に飛び込んできた。上から見ると、緑の葉に覆



われた樹冠が、エメラルド色の宝石を敷き詰めた
カーペットのように四方八方に広がり、それを青
い空が取り囲んでいる。
この景色には、「川のカウボーイ」たちもすつ
かり魅了されたようだ。ロマーリオもカシカシマ
は初めてだ。この崖から大地を眺めると、感覚
が研ぎ澄まされ、観想が深まる。精霊と大地の
許しを得て、私たちはここにいる。歩んできた
道を自覚し、来るべき道を見守る。
オーナー・エリア・マガジン・エキストラにて、この
記事の関連コンテンツを掲載しています。ORコード
からぜひご覧ください。patok.com/ja/オーナー

